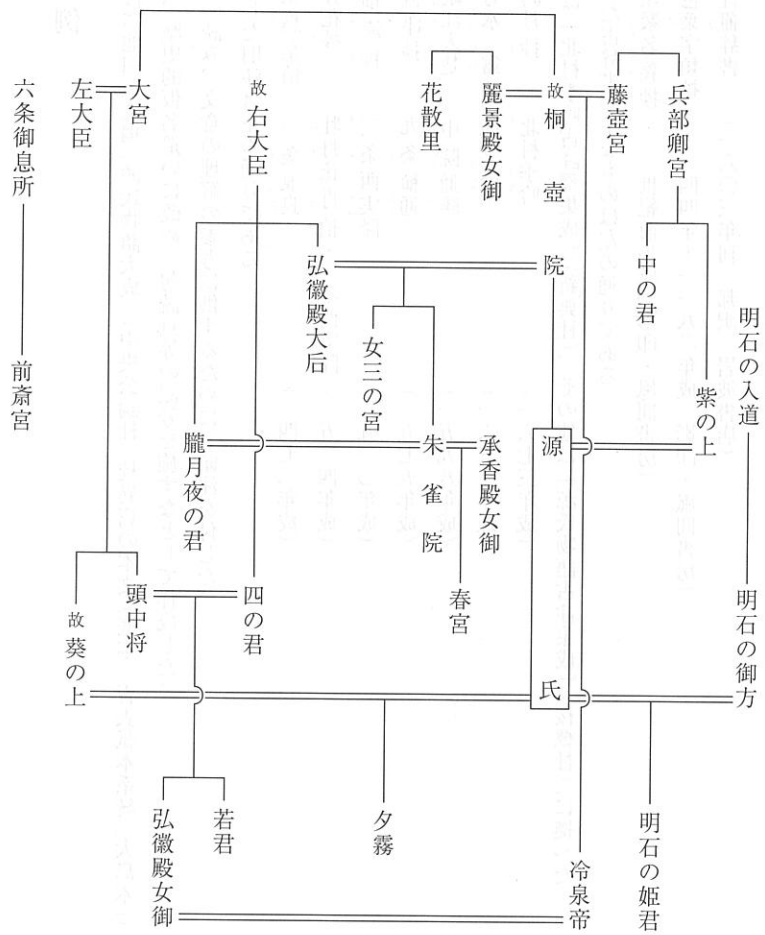
［人物関係図］ 呼称は通称による



一 巻名は、源氏と明石の御方の歌、「みをつくし恋ふるしるしにここまでも巡り合ひけるえには深しな」「数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひ初めけむ」〈四三頁〉による。

二 今、源氏二十八歳、紫の上二十歳、藤壺宮三十三歳。故桐壺院。三月上旬に見た源氏の夢の中に現れ、「我は位に在りし時、…おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて…」とあった〈明石〉。

三 底本「たまえむつみ」。青表紙本六本・河内本五本「給らんつみ」。

四 源氏、八月上旬帰京。

五 「カミナツキ」〈字類抄〉、「カミナシヅキ」〈文明本節用〉、「Caminazzuqi. カミナヅキ」〈日葡〉。

六 弘徽殿大后。朱雀帝の母。

七 源氏。

八 朱雀帝。

九 「（源氏ヲ）何事も御後見とおぼせ」という遺言〈賢木〉。

澪[一] 標[くし]

さやかに見えたまひし夢の後[のち]は、院[二]の帝[みかど]の御ことを心に掛けきこえたまひて、「いかでかの沈みたまふ[三]らむ罪救ひたてまつることをせむ」と思[おぼ]し嘆きけるを、かく帰[四]りたまひては、その御いそぎしたまふ。神無月[五]に御八講[はかう]したまふ。世の人なびき仕うまつること、昔のやうなり。

大后[おほきさき][六]、御悩み重くおはしますうちにも、「つひにこの人をえ消[け][七]たずなりなむこと」と心病み思[おぼ]しけれど、帝[みかど][八]は、院の御遺言[九]を思ひきこえたまふ。ものの報いありぬべく